

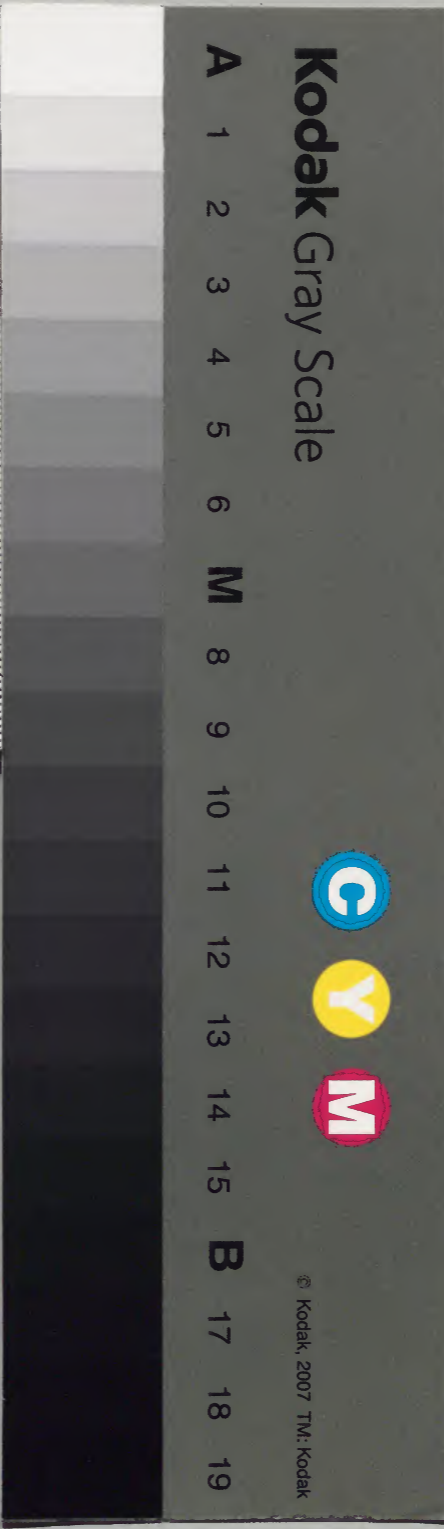
日本書紀傳

十七卷上

四十五

和書
一〇五二號

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156	(54)
函號	特	85 1



教部
文庫
印

南無
阿彌
陀佛

第二

日本書紀傳十七之卷

神代上第十五

瑞珠盟約章

穗積重胤

謹撰

一書曰素戔嗚尊將昇天時

有一神號羽明玉此神奉迎

而進以瑞八坂瓊之曲玉故

素戔嗚尊持其瓊玉而到之

内一二六八三號

○日本書紀傳十七

〇一

於天上也是時天照太神疑
 弟有惡心起兵詰問素戔嗚
 尊對曰吾所以來者實欲與
 姊相見亦欲珍寶瑞八坂瓊
 之曲玉耳不敢別有意也

摠ての事ぐるの詳あり狀ハ一も正書の委一も如
 すと雖も簡古ありて事實の正一貫通事獨此第
 二一書小の留りけり傳々の狀も競はず獨
 立て甚美なり一先其大旨を云む素戔嗚尊の天
 小昇坐むと出立一御在一坐ける時小羽明王神の出
 迎へらせ奉給へる事ハ下小天照太神謂素戔嗚尊曰
 以吾所帶之劍今當奉汝汝以汝所持八坂瓊之曲玉可
 以授予矣如此約束共相換取と有る應く文ありて
 其物根を相換させ御在一坐て御子を生出させ給ふ
 事の基と成る所あり有ければ必此小然一も非ずハ

得有べうらざら者小あむ有け

但其物根を取換て
せ給へる事ハ正書

此ハ返様少て於是天照太神乃素取素彥鳴尊
十握斂云云既而素彥鳴尊乞取天照太神鬘髮及腕所
纏八坂瓊之玉百箇御統云云所見たれハ此羽明玉
神の玉をハ縦や奉給はずとも物を相換させ給へる
傳の有れハ孰れを是と孰れを非とて云べり
ざら似たりと雖も其ありハ事實の真ハ違ふ事已
小傳十五卷百九十五下小論
を起して次々説註々々如く古語拾遺ハ於是素彥

鳴神欲奉辭日神天照昇天之時擲明玉命奉迎獻以瑞

八坂瓊之曲玉素彥鳴神受之轉日神奉と所見たれハ此

羽明玉神の迎奉らせ給へるハ其最初の時小在べり

事云も更ふ事あり淵地神本紀小此の正書小始

素彥鳴尊昇天之時淵と有る所小置て素彥鳴尊詣曰吾

今奉教將就根國故欲暫向高天原與姊相見而後永退

矣伊弉諾尊勅許之乃昇詣之天也素彥鳴尊將昇天時

有一神號羽明玉此神奉迎而進以瑞八坂瓊と曲玉矣

素彥鳴尊持其瓊玉而昇天之時溟渤以之鼓漫山丘為

之啼鳴响と文を序次たハ實小然る事あり必右の如

く無てハ叶ハざら所ありけり者あり然れども上小

引々此の文と換て其下小天照太神素彥鳴尊共誓約

田曰吾以所纏之玉可以授汝矣汝以所帶之斂可以授吾

矣如此約束相換取已畢と詔せりハ御紀の正書一書

共小三女神ハ斂小成坐一五男神ハ玉小成坐る傳ふ

るが故小其旨小合せむと諛いたる所爲小して中
小頼りけ無きハ然す小例の合せ物あるが故
めり又古語拾遺も右小引る文の如きハ然る事あ
ら其も下小仍共約誓感其玉生天祖吾勝尊と有る合
か事有り其玉ハ己小素戔嗚神受之轉奉日神
と有れハ日神の御手小渡し奉れり然れバ感其
玉と云事ハ日神の御所爲成へきを次小天照太神
育吾勝尊と有れバ猶素戔嗚尊の生坐りあり然るバ
素戔嗚尊御自の物根を以て御自御子を成給へる小
成て掛ましくも甚も可畏き天津日継ハ全く素戔嗚尊

の御子孫と成て天神御子とハ申奉る可なりぬが如
一然計内博く學ばれたる廣成主の然る所由を心得
ざらん小ハ非れども猶其も此第二一書の如く三女
神ハ玉小依て成坐し五男神ハ劔小因て成坐る傳の
當否をしも未定の^{得る}故小出來れり僻事と
あむ所見たりけり 平田翁ハ古史ハ紀記を参考へて
文を成されたる者あり小其第三
十二段ハ素戔嗚尊の天小昇詣させ給へる所ありを
此羽明玉神を探し漏されたるハ不足ぬ事あり此ハ
後ハ御子を成坐る事小係れり甚く大切なり所あり
を思ひ落されたる小あむ有ける所以小三女五男の
神等の成坐る事あり異あり一節有る趣
をも思等々れりけり可憐しけれ 偕此下小
此羽明玉神の進りたる玉を天照太神小獻給ひ天

照太神の御劔を賜りて相共小御誓と爲させ御在し
坐す御事有て天照太神則以八坂瓊之曲玉寄於天
真名井 嚙断瓊端而吹出氣噴之中化生神中凡三女
神於是素戔嗚尊以所持劔寄於天真名井嚙断劔末
而吹出氣噴之中化生神中凡五男神云尔所見たる
ハ此一書の伝傳ハハ勝りて獨正實を得たる者ハ
ウけり古事記ハ於是天照太御神告速須佐之男命是
後所生五柱男子者物實因我物所成故自吾子也先所
生之三柱女子者物實因汝物所成故乃汝子也如此詔
別也と見えたるガ如く三女神の生坐る物振ハ根ハ一も

素戔嗚尊の八坂瓊之曲玉ハ因て成出給へれば即素
戔嗚尊の御子と有り次ハ生坐る五男神の物根ハ一
も天照太神の御劔ハ因て成出させ御在し坐るハ因
て即天照太神の御子と坐す事物根の異ハ有れども
此の正書の趣ハ違ハざりける者多ク然れども其
玉ハ素戔嗚尊の御物トハ雖も其始天ハ參昇り御在
し坐し時ハ羽明玉神の進り物あり有ければ猶否
む邪説も有あむ々あむども天照太神の御劔ありと
ても皇太神の御自作給ひて帯せ給へるハ非れば何
れより得給へりとも其持主と成らせ御在し坐す上

ハ其主の御物ふこりハ有けれ其本の本迄を争て
ハ云べりむ然れバ此ハ素戔嗚尊の天照太神の御
傳るれり文ありけり其原羽明玉神より進りて其
玉の素戔嗚尊の御物と成れり始を明し知べき所ふ
るり○將昇天時有一神号羽明玉此神奉迎云云の狀
を此小引出て其趣を明しむ可き文有り天孫降臨章
第一一書小已而旦降之間先駈者還白有一神居天ハ
違之衢中略天照太神之子今當降行故奉迎下略と所見
たる是あり此文を此小假て照し稽ふり小已小天小
參升り御在り坐す途中ミチナカあての事ハ有べりず正
書小出たり御父大神の勅許を請奉らせ給ひて今も

出立り御在り坐むと其御裝束の御事を物爲とせ御
在り坐す御間の事とあり見えたりけり右小引り旦
降之間と有る語の有を合せて想ふ可き者ありけり
又古事記の同ト御天降段ハ僕者將降裝束之間と云
云語も有り又右の且降之間と云ふ同ト事を將天降
之時と有を以て時と間との等しきをとも知べし諸此
小天小昇りむと爲給ふ所彼ハ地ハ降坐むと爲給ふ
所ありを例小引て云ハ如何なる事ありとも共小我
處を離れて他小物爲させ給ふ出立の事相等しり
ぬ可けれバ引者正書小於是素戔嗚尊請曰吾今奉教
出たり者あり將就根國故欲暫向高天原與妙相見而而後永退矣勅許
之乃昇詣之於天也と見えたりハ己小傳十五五十小
註カ如く此素戔嗚尊ハ限奉りず何れの神ハ在れ

一 借其將昇天ハ何れありて別處にて裝束一給へ
カレハ時の事ありて先達て伊勢諸大神より昇天
の事を勅許一宣はせたる小就てハ羽明玉神を以て
其符信として八坂瓊之曲玉と此ハ令賜て其昇坐む
道とバ彼殿 馭盧島の天柱より出立一升り御在り
坐べく掟させ御在り坐て其羽明玉神をバ其道より
令白給へり其即此ハ奉迎と云ふ所ハ當れ者あり
右の一を説得る時ハ如此く其事ハ就たる件この御
事ハ至る迄も今も正目ハ見奉るが如く其詳あり趣
とも思得るあり我れども妙ハ奇異ハ事ありけ

ハ主張て其道より昇詣させ御在り坐けむ事申すも
更あり 予己くより思けくハ上ハ引る如く古事記
雲國玉作祖也と有るを神名式ハ意宇郡玉作湯神社有
り風土記ハ忌部神戶郡家正西一里二百六十歩云
川源出郡家正西一十九里拜志山北流入干海と有て
郡家より行程ハ同トけね玉作湯神社の所あり
其羽明玉神の奉迎ハ地ありや有けむ其素戔
鳴尊の御在り坐す神名式の熊野主神社名神大も同
ト意宇郡より有けね由有る狀ハ思へり後ハ事ハ
此羽明玉神の其國ハ坐事ハ天孫降臨より後の事ハ
可く又素戔鳴尊の其國ハ御在り着給へりも高天

○日本書紀傳十七

○八

然りと雖も其衣
彼國に住む所以ハ
此の起りも事云も
更あり

原より神逐ハハサセ給いて天降り坐し後の事ハ
有れハ此ハ由無ク事ありバ今其考を棄たスアリ
安政四年正月十三日ハ至りて
此説ハ政む事ハ成れりマ
○有一神ハ右ハ引ル
天孫降臨章第一一書ハ猿田彦神の出迎へ奉給へ
所ハ有一神居天八達之衢と見えたる皇御孫尊の
御方ハ諸伴神を陪從へ給ハ八十萬神を供奉ハ
て天降り御在し坐むと爲させ給ハ其幸行の狀の大
あるハ唯一柱めて出迎奉ル狀を諦ハ令知むとて殊
更ハ有一神と書せ給へ御紀の文法あり事を
説べりあり然ルハ傳十五百五十
九丁ハ註せるガ如ク
天照太神の待設させ御在し坐ル文共を合せ考ルハ

正書ハ徑詰問焉と云ハ語有ハ御伴神等ハ委ね給ハ
ずして日神の直ハ詰問給ハ由少テ第一一書ハ親迎
防禦ハ有ル親ミコトハ同一又此ハ起兵詰問と有ハ兵卒を
領テ親詰問ハせ給へり又第三一書ハ隔天安河
相對而之と有ハ謂ゆる對陣と云趣あり此を以て日
神の御方ハ御勢の多在りハ事を知べハ斯時其日
太神の御方めてハ素戔嗚尊一柱のミめて上來坐む
ハ何とハ衆神を從へて待せ給ハ素戔嗚尊
鳴尊ハ赤心めて仇ハ奉ルセ給ハ御心ハ御在し
坐すルガも許多の御伴神を從へ昇ルセ給へるガ

今有末小櫛明玉命之孫造御新玉古語保使直衣向今在出雲國每年與調物貢進且至見えたる此時の由緒小依り可く所思

故小當有奪國之志歟と云ふ御疑をも受奉らせ給へ
るあり此を以て素戔嗚尊の御方ゆも御勢多きを知
る時ハ此小有一神とハ其小對へて云語ある事を明
くむ可き者あり然れハ此小有一神有と有あり其御
明くめ奉る可き文あり事右小云る天孫降臨章第一
一書小合せて知べし然るを世人古書を讀む事の疎
あつた爲小神と云へハ唯一神有て出迎へたり
事と容易く心得る故小を以て大を測り右を見
て左を知りぬ妙處を得る小至るざら哀れむ可く
笑ふ可き事あり古書ハ然る妙小奇し味有る
も得知すて物言ひ誇る筆計ハ羽明玉神古語拾遺
心稚り者ハ世小非るがう見え秘庫器録小速須佐能神將上天之時奉出神名櫛明玉云と
小ハ櫛明玉命と有り亦名あり又太玉命所寧神名略
櫛明玉命と有る其下小出雲國玉作祖也ハハ見え

今一書五部神の中
小玉作上祖玉屋命と
見え

ウ此小ハ次あり寶鏡開始章第一一書小玉作部遠祖
豊玉者造玉と見え其第一一書小ハ中枝懸以玉作遠
祖伊弉諾尊兒天明玉所作ハ坂瓊之曲玉とも有り天
孫降臨章第一一書小ハ櫛明玉神爲作玉者と出たり
古事記石屋戸段小ハ科玉祖命令作ハ尺句璉之五百
津之御須麻流之珠と見え其御天降段小ハ玉祖命者
玉祖連と有り又古語拾遺小ハ令櫛明玉神作ハ坂瓊
等之祖
五百箇御統玉と有る神祇本紀小も載せて其下小令
玉作部遠祖豊球玉屋神爲造玉者と有る皆同神異名
あり又其豊玉を神名式小阿波國名方郡天石門別豊

玉比賣神社云右有り又神名秘書古語拾遺を引て未

小櫛明玉命玉作高皇產靈神女栲幡千千姬命之妹也

と見えたり女神御在坐侍侍灼然者あり但

章第三一書ハ伊弉諾尊兒右ハ高皇產靈

神女有然々を姓氏録右京神別上天神ハ玉作速

高魂命孫天明玉命之後也有定難如此論云ハ煩ハ可可けハ下章第三一

書の傳ハ云名義羽明玉の羽ハ借字ハ映明玉神

の義あり可一天孫降臨章第二一書あり下照姬命の

歌句ハ阿太陀磨波夜と有を口訣ハ玉相映之言ハ云

是あり乃ハ葉十七ハ多麻波夜須武庫能和多里

ルハ續けたハ玉映す棕と云義ハ波夜須ハ磨す

て光を令映ハあり冠考ハ和名抄膠漆ハ木賊棕葉ハ

無久あど云ハ榮花物語ハ御堂の板敷を木賊棕葉ハ

ハ磨ハ事有ハ又俊成郷の或人の歌を讚ハ棕

の葉磨を成ハ者ありハ云ハけハ事有ハ波夜

須ハ此ハ玉の老ハ令増ハ云ハハ云ハハ如

一又乃葉十四ハ阿良多麻能伎信乃波也之ハ亦ハ有

ハ年月の來經ハ事ハ云ハ係ハハ猶璞之映ハ續

ハ心あり可一又神名式ハ陸奥國志太郡敷玉早御玉

神社ハ有ハ數玉ハ重玉ハ多緒ハ貫ハ玉ハ

ハ相映ハ合テ光の榮中ハ義ありハ聞ハ右の如ク玉

小ハ波由と云語有ハ其灼約りて羽明の羽あぢの如
く波の一言ハ成れり者ありけり其證ハ垂仁天皇
三年御紀天日槍ハ將來ハ物の中ハ羽太玉一箇と
云有ハ其も映ハ太ハつて玉の氣韻の太く映ハるハ依ハり
名と説ハり外無を以て羽ハ此も映ハるハ事を曉ハる可
くあむ有けりハ因ハ云ハ又其中ハ鷄鹿鹿赤石玉一箇
と云有ハ度會延經説ハ鹿鹿明也と云
る其も然ハる事ハ有れども鷄鹿鹿ハ麗ハ炫ハと云言ハ
て下ハ赤石と云む序あり可ハ一諸神名式ハ播磨國明
石郡赤羽神社ハ此玉を祀ハりハハ非ハるハ赤羽ハ明
映ハりて右ハ玉の麗ハく明ハるハハ謂ハハ依ハりハ神名
と聞ハゆ明玉ハ字の如く玉の光の映ハて明ハるハハ由
あり出雲神賀詞ハ赤玉能御阿加良毘坐喜玉能水江

玉乃行相ハ明御神略ハと有ハ上ハありハ赤玉の如く御
面の赤くハ坐む事を述べ下ハありハ玉の行相ハて交ハ
照合ハふ事を序ハりて明御神ハ續ハけたハりて此の明
玉の例あり猶阿加流と云事ハ方葉四三十四ハ赤羅引
日母至闇十二十五ハ朱羅引色妙子十一五ハ朱引朝行
公又六未引秦不經ハあり有ハ阿加良ハ天色の明ハるハ
と人面の麗ハくハりて云あり又十六二十五ハ小奥太哉赤
羅小船尔二十二十一ハ小伊奈美野乃安可良我之波ハふ
と有ハ赤ハき色を云あり又十八二十二ハ和我佐世流安
加良多知婆奈と有ハ十九三十四ハ小島山尔安可流播ハ

と有を以て右の阿加良ハ阿加流ある事を曉る可
但此明玉の阿加流ハ赤色を云ハ非ず何ハ在れ玉
を琢磨して明くゆく成し其光を映有せ給ふ義の御
名ある者あり諸其物光の明くゆくある其極ハ終ハ
赤色ハ成る物あり故ハ其言の同ハ
者ありあり猶又下章第二一書第三一
書等ハ其赤名の義を説くも考ふ可
○奉迎ハ其將
小天ハ昇坐むとして其装束を物爲させ御在し坐す
所ハ出迎て其天ハ上り給ひむ道ハ此天柱より出立
し御在し坐べしと申給へるあり此ハ瑞八坂瓊之曲
玉を奉進する事ハ其素戔鳴尊の日神の大御許ハ
昇詣りせ御在し坐む事を勅許し宣はせたる表物ハ

を以て推量奉るハ此羽明玉神ハ伊弉諾大神の御
使めて迎奉給へる事著明り者あり其ハ下ハ天照大
神疑身有惡心起兵と有る程の御事ありしハ日太
神の御許人を以て令出迎給ふまじき時ありを以て
明くめ奉る可くある有けり古語拾遺ハ於是素戔鳴
神欲奉辭日神昇天之時
梯明玉神奉迎と有れども昇天之時ハ誤あり其
も欲昇天之時と欲字無てハ此の事實ハ相叶ハざら
を思ふ諸此ハ伊弉諾大神の御心ハ依ねる御事ハ右
ハ條ニ云々如くあるが其蹟を探索るハ實ハ皇祖
天神の御計くひふころ御在し坐べし其ハ傳十
五十五下又百ハ十二下小己ハ註々如く天照太神素戔鳴尊

二神ハ一も四神出生章ハ伊弉諾尊伊弉册尊共議曰
吾已生大八洲國及山川草木何不生^生天下之主者歟
宣給ひて生給へり一珍子神等ハ渡^渡せ給へるを天
照太神ハ高天原を統御す皇太神として天地ハ照臨
すせ給ひけりハ天下之主^主者ハ御在^在坐す次ハ素
戔鳴尊ハ天下を所知^知事依^依て賜へり一^一も吾
欲^欲母^母於根國と申給ひて神逐ハけりせ奉給へり一
ハ此も亦天下之主^主者ハ御在^在坐す成^成りけりハ天
下ハ實ハ主無^無空國の如く^如あむ成^成りけりを素戔
鳴尊ハ根國ハ入坐^坐むとして其^其辞申^申ハ高天原ハ參^參向

ひて日神ハ覲奉^奉せ給ハハ事を請申^申させ給ひけり
小勅許^許一宣ハせたり^りあむ謂^謂ゆ^ゆ預^預鑄造天地と云ハ
皇祖天神の靈威の預加^加ハけり所^所ありけり一若^若て羽
明玉神の出迎へて導奉^奉る^る一^一も其御有^有狀の甚
りりりつると此天下を治さざるとの御事ハ依^依てハ
皇太神の御心打解給^給わざり^り故^故ハ終^終ハ共^共ハ誓給^給ハ
運^運び^びハ成行^行て二柱神共^共ハ奇異^異あり御所^所爲^爲ハ依^依て皇
太子ハ一^一も定め^め御在^在坐^坐す御事ハ成^成て何^何不生^生天下
之主者歟と宣給^給へり^り御言^言此時^時ハ至^至りて結^結ハけり
と云も豈自然の御事ありやハ皇祖天神の御靈の

相預ひ大坐して然る事ハ趣けさせ御在し坐る事
決くあむ有けり又正書ハ是後伊弉諾尊神功既畢靈
運當遷是以構幽宮於淡路之洲寂然長隱者矣亦曰伊
弉諾尊功既至矣德隱亦大矣於是登天報命仍留宅於日
之次宮矣と有り天忍穗耳尊の天津日繼と定まらせ
御在し坐す御事を所知者看の上ありてハ得有あり
きと思定む可くあり右の是後と云ふ合せて始素戔
鳴尊昇天之時と有る始ハ先是
と云語ハ當れりを以て考るハ其皇太子の定まらせ
給ふ迄ハ未神功既畢と云所めてハ非あり右ハ云
る如く天下を依し給へる素戔鳴尊の根國ハ幸行す
小就てハ愈隱れさせ給ひ難かりつむを後ハ皇太
子の生出させ給へる小就てハ亦も思わし遺る限
無く皇祖天神より仰給へる御言を過なず成し畢給

へるあり是後と云事深く○瑞八坂瓊之曲玉ハ天孫
味ハ不可き所あり者あり
降臨章第二一書ハ瑞之八坂瓊と有を以て瑞之訓
附べし瑞ハ物の麗美しきを称云ふ辞あり其例ハ先
御名ハ反正天皇御紀ハ天皇初生于淡路宮生而齒
如一貫容姿美麗於是有井曰瑞井則汲之洗太子時多
遲花落有干井中中略故稱謂多遲比瑞齒天皇と有を古
事記ハ御齒長一寸廣二分上下等齊既如貫珠と見
えたり如く御齒の美麗しきを以て瑞齒と称奉れり
あり又續紀ハ元正天皇の丈御名を日本根子高瑞淨
足姬天皇と有り高瑞ハ氣高く麗美しき意を以て称

合出雲神賀詞書
玉能江玉有善書
玉の瑞の善玉云
奉りて其瑞麗美
一と云云称あり
合考可

奉りて天御名あり宮室ハ古語拾遺天石窟段ハ瑞
殿古語美豆能美阿良可、見え又寶劔出現章第五一
書ハ檜可以為瑞宮之材と云語有ハ崇神天皇五年御
紀ハ遷都於磯城是謂瑞籬宮と有を私記ハ瑞籬俗云
美豆加岐一云以賀岐と云以賀岐ハ忌籬少て己心ハ
齋清めたる義少てハ有れども又其ハ麗美ハ意ハ
ハ器財ハ古事記玉垣宮段ハ汝所堅之美豆能ハ佩
者誰解と有ハ瑞之小帶と云事少て万葉小謂ゆ下
紐の事あり又朝倉宮段歌ハ美豆多麻宇岐と有ハ瑞
玉蓋と云事あり又天孫本紀ハ十種神寶の事ハ天璽

瑞寶と云類是あり此を珍寶と云ハ當て瑞寶と云
通ふ可と言ふるを也知るあり此を以て瑞ハ珍とハ相
小表比毛と訓わたりども若くハ表意毘して上帯を
大帯と云ハ對へて下紐を小帯と云ハ非トリ名義
秋ハ佩を意倍理とも意毘多理とも意夫とも意婆志
年とも有ハ諸皇大御國の大號をとも瑞穂國と云事ハ
ハ國號考小云わたり如く皇國ハ萬の事ハ物も
異國ハ勝れ中ハ小ハ稻ハ殊ハ萬國ハ類無ク曼ハ
小卓榮れて甚美たく麗ハハ故小員と称號ありハ
稻を称へて瑞穂と云ハあり又此准ハハ草木の稚
く麗ハハハ云事ハ今又云ハハ神武天皇御紀歌
小湊都湊都志と有を古本ハ瑞瑞志ハ書入ハハ瑞ハ

美豆と濁て云言ふれども其本の清音少く美都と唱
 わりしや古事記にも美都美都斯と有り此も右の
 瑞穂と同く木の茂りて麗美しく榮えて瑞くしき
 状多きを云ふ發語あり万葉一二十藤原宮御井歌小
 日本乃香具山者云云春山跡之美佐備立有又耳爲
 之香管山者云云直名信神佐備立有と有る中小狭ま
 ねて畝火乃此美豆山者日緯能大御門尔弥豆山跡山
 佐備伊座と有る山形を以て瑞山と云ふ非ず十三
 十二 小栲垣久時後と有る栲小同く木立の繁く麗
 しくきを愛て云あり右の香具山香管山の香字と

△六六の水枝指四時
 亦生有刀裁の樹能

も合せ思ふ可く冠辞考の万葉十三二小百不足三十
 槻枝丹水枝指と詠み世小若木を美豆木若枝を美
 豆枝又若く健くあり人を美豆美豆斯あど云れと云
 此又稚き子を三五十小若子と書る類も美豆の轉れ
 る小も書有む但同考の美豆と云ふ言ハ先ハ草木の若
 く麗美しく榮ゆるを云より萬の物を
 讚稱へて美豆某とハ云けしと云ねたれども言の
 本ハ然小非ず其ハ此下小季しく云を見る可きあり
 又祥瑞と云事の如き小瑞字を書て美豆と訓ねたり
 神武天皇有金色靈鷲飛來止于皇弓弭と有る下小得
 鷄瑞也と有り垂仁天皇三十四年御紀ハ天皇於茲執
 矛祈之曰必遇其佳人道路見瑞比至至行宮大龜出河

應神

△カ仁徳天皇御紀
元年の天皇自宮内
大臣の産屋の上
居たり鳥瑞依て
瑞給へ事と兼有
瑞是天之表也
有未漢之瑞也
給へ事と兼有
天神の表也
カ右寺

中天皇舉元刺龜忽化爲白石謂左右曰因此物而推之
必有驗卒と有あじ此ハ正しく神カ祈カびて其驗有
むと爲る兆の見ハることを云々孝徳天皇御紀以下ハ
煩さく所見たる漢風の祥瑞あじ云ハ兆あり然
れども瑞を美豆と云事ハ何れの御卷カ在も同カり
者あり然るを歷朝詔詞解ハ右等の瑞を美豆と訓る
見ハることを美豆と云ハ其休祥ハ因て應驗有
を志流斯と云ハ本ありけれハ瑞を名義故ハ志流須
と有り又御紀以下の御史ハ志流斯と訓るガ常あり
とて其ハ依て美豆と訓を強ハ僻事トハ云べり
者あり通證ハ説文瑞以玉爲信也周禮典瑞掌玉瑞
玉器之藏註人執以見曰瑞瑞符信也と云ハ此字義
を云々言義美豆ハ精出カて傳三カハ説々天地萬物

の本と有り又其天地萬物ハ藏カて外ハ氣韻カと成て發
出る精カく妙あり物是あり又此美豆の美ハ迹カハ通
ひて八洲起元章ハ喜哉又妍哉又美哉あじ右を古事
記ハ阿那迹夜斯と見えたる迹カも右の精カと同一義ハ
る言あり傳六カハ十五カハ百十カハ註々事共を合せ考ハ
可事あり然れバ草木ハも萬物ハも右ハ舉る如く
瑞果カと云ハ稚カく健カりありて麗カく美たり物ハ各其
中ハ藏カれハ精粹カの表ハ溢出カる爲ハ然云事ハ祥瑞
を美豆と云も又其カと同一意味ハ皆同言あり者ハ
カ美と迹カハ相近く通ハ例ハ神名式の和泉國大

鳥郡大鳥美波比神社を本國神名帳ハ正一位尔波
 比社と有り又古事記訶志比宮段歌ハ迹本栢理と有
 皇明宮段歌ハ美本栢理と有り又姓の壬生ハ尔布
 と云を皇極天皇元年御紀ハ乳部此云美文と見え
 たゞか如く美と迹と相通ハ例あるを正して美豆也
 妍出の義ある上の説を明く可瑞字を名義故ハ
 波流とも有ハ麻許登ハ精ハ當り阿良波流ハ右の精
 出又ハ妍出ハ當りハ奇ハ事あり又輿志とも志
 流須とも加奈布 ○八坂瓊傳十五百ハハ出○曲玉ハ
 とも云訓見ゆ 字の如くして緒ハ貫き縮収たゞを以云称あり然
 ハ此八坂瓊之曲玉を皇太神宮儀式帳ハ八尺鬘之

曲玉とも有ハ八尺ハ正字ハ玉を多く貫連収たゞ
 を以て八坂瓊と云い其を一ハ統緒ハ故ハ曲玉と
 ハ云ハあり故古事記ハ八尺句惣と有あり此ハ如
 此有小應へして下ハ瓊端瓊中瓊尾と云事ハ此玉緒の
 本末と云ハあり下章第三一書ハ解其左鬘所纏五百
 箇統之瓊綸而瓊鬘瓊瑤濯浮於天滄名并鬘其瓊端
 有を以て一玉の端中尾ハ非ハ連珠の初中後ありを
 曉る時ハ即曲玉ハ緒ハ貫き縮収たゞ玉あり事知
 たりあり 然るを記傳七卷ハ句惣ハ曲れ玉あり細
 有ハ是緒を連せハ所あり可ハ今も時ハ地下ハ
 出ハ事あり是古の句惣あり可ハと云ハたゞ今

俗小其句璉と云物ハ其緒ハ貫ル端ハ出タル玉也其形曲リテ圓也然レバ然レ云ベキ名ノ状ハ有レ
 ツも若然ルハハ八坂瓊之曲玉と云ハ緒ヨリ外小
 續けル玉を云稱ハ成ル者アリ此事下ハ又も云ベ
 己小傳十五 百十小對馬國下縣郡住吉神社ハ傳ハ
 々々曲玉圖ノ事ハ就テ引出タル藤田一正と云人ノ
 文ハ據圖玉皆青色貫以赤絲其狀頗類命珠玉之如短
 管者累ニ相連百數左右西門大小相稱其長三尺又
 有橫相通者凡三處其管玉比左右稍小皆結以句玉句
 玉凡八如鉤而有孔可以相連其上可以嬰頭頭其中可以
 當胸其下可以當腰と有り此也ハ八坂瓊之曲玉ノ形
 狀を知ベキ也然レども其結ル所ハ有ル鉤也

玉を句玉と云稱呼の如く心得て記せらハ俗意あり
 右の如く緒ハ貫リ縮ぬルを曲玉と云ハ
 争で一玉の名ハ有ベキ但細管ツグミありを管玉と云
 ハ圓球ありを丸玉と云ハ其ハ對へて句玉と云稱
 も後ハ出來ルも有ベキ也神代ハ曲玉と
 云ハ其全体の名あり事云も更あり夫木集ハ麻賀理
 能玉と詠ルも曲ル玉と云事ありとも思合す可
 然ル也或人古言本音考を著して右の賀を濁ルを
 麻賀理と清て眞清明の義ハ爲ルハ本ヨリ拙キ人ノ
 説ありハ云ハ足ざレども横井千秋説ハ句曲あり
 書ハ例ハ借字也目録玉あり古事記仲哀天皇段
 小目之炎輝種ハ珍寶同段 御紀ハ眼炎之金銀
 彩色と見えたりハ同ト然レハ此ハ玉ノ世ハ麗ハ

きを祢美たる名ありて觀ゆき、あて照炫く由あり然る
を昔より唯其形の曲なり故の名と心得來り、ハ僻
事あり形の曲なりハ何の然計の變なり事あり有む
と云る曲玉の説ハ宜しと雖も目赫玉の説ハ然も有
くあり、ハ事あり、ハ傍仲哀天皇八年御紀ハ筑紫伊
觀縣主祖五十迹手聞天皇之行^拔取五百枝賢木立^手能
之舳艦上枝樹八尺瓊中枝掛白銅鏡下枝掛十握劍^{略中}
奏言臣敢所以獻是物者天皇如八尺瓊之句以曲妙御
宇^{シラセ}且如白銅鏡以分明着^{アキラカニ}行山川海原乃提是十握劍平
天下兵と見えたる此事神皇系圖神皇實錄寶鏡開始
天口事書等ハ天孫降臨の御時ハ三種神寶^ト皇御孫
尊ハ授進^トせり、ハて天照大神の壽祿させ給へる大

御言と記せられ上代ハ定りたる賀詞を以て奏せり
一者あり、ハ如八坂瓊之句ハ八坂瓊ハ例の玉を緒
ハ貫連けたる祢あり、ハ然して結纏めて^{右ハニ}念珠の如く
成せり其即曲玉と云物あり、ハ故ハ其曲りて謂ゆ
環の端無^ク如くあり、ハを譬ふして御宇^{ミヨ}の限無きを壽
祿ハ申せり、ハあり曲妙を本ハ多幣^ハと訓れども妙字
ハ泥^ニたる僻訓あり、ハ賀茂翁の祝詞考ハ都婆良加ハ
ハ訓れたるハ下あり、ハ分明^{アキラカニ}と相對^{アヒサズ}て甚美たり、ハ且都婆
良加ハ須夫流^ニと相通ひて彼御統^{ミスマル}と云あり、ハ合ひ又其
句^ハハ狀を圖^ハあり、ハ由有て實ハ勤くまり、ハ正訓

あり若て曲妙御宇と云ハ漏落事無く御世知食と
せ給ふ可いと云事ありハ其も亦此曲玉の具と備
ハれり狀ハ係りて聞ゆるを以て曲玉の説をある思
定む可なりけり 本ハ曲妙を多幣ホと訓ハ何なる
義なり其ハ物の奇しく靈しく事ハ
云ふ言ハころ有け此天皇の御世所知者御事何
でハ然申奉るむ其上ハ八坂瓊の句れを以て
妙ありとい云べ 進ハ此ハ羽明玉神の進る
事ハ非る者あり
事ハ有れども其實ハ上あり云々如く素戔鳴尊
の天上ハ昇詣させ給ひて天照大神ハ覲え奉給ハむ
事を御父大神ハ請奉らせ給へりけりハ其勅許給
へり御信として八坂瓊之曲玉を令賜給へり此ハ

して奉進給へり所ありあり 此玉を伊弉諾大神より
授賜へり信物と云事ハ
予ハ始て云出たる事ハて臆説の如くハ有れども
然ハ非ず上より次ハ説來れり如く事の運びの然
も無くてハ上下の義 ○持其瓊玉ハ此ハ持と有ハ其
理相貫ざる者なり
御頸ハ所嬰かせ御在り坐す御事を申せりあり右ハ
も註せりが如く八坂瓊曲玉ハ 傳十五十六ハ御頸玉也其
御頸ハ懸て御胸
より御腰ハ至り迄打延へ取懸る物ありを第一一書
小己而素戔鳴尊以其頸所嬰五百箇御統之瓊略と云
事見え第三一書ハも素戔鳴尊合其左鬢所纏五百箇
統之瓊と也又合右鬢之瓊と也又合嬰頸之瓊と也有
り下章第三一書ハも素戔鳴尊乃輻輳然解其左鬢所

纏五百箇統之瓊給ふども云事の有る素戔嗚尊の御
自其小因て御子を成し坐る趣ありハ僻事ハ有れ
とも其高天原小參上り坐時小羽明玉神より八坂瓊
之曲玉を得て御類小所嬰させ給ひ其御身小取装ひ御在し坐し傳の此小在
くく小然々一説共ハ出來り者とあり見えたりけ
る古語拾遺ハ素戔嗚神受之轉奉自神と有ハ余ハ
玉神の奉迎くけりハ將昇天時と有て未出立坐さる
以前の事ありを彼書ハ昇天之時と書して其天上
小升給ふ半途ゆてり○到之於天山也ハ正書ハ勅許
事と爲るも遷へり之乃昇詣之於天也と見えたり是あり口訣ハ持其瓊
玉而到之於天上也者素戔嗚尊詣昇天於伊弉諾尊勅

許之以持玉昇天儀也と有り此ハ然ハ云さねども
其持せ玉ハ伊弉諾尊より勅許し宣はせたる信こ小
授賜はせたる物ありけりハ其を證據アハシとして持參上
りせ御在し坐すと云ふ意味を以て書るあり然ハ其
註何の事とも聞えざり若予ハ今聞取ら如ハ其
くむハ已く予ハ意を得たる説と云べりけり者
ハ○疑算有惡心ハ正書ハ始素戔嗚尊昇天之時溟渤
以之鼓盪山岳爲之鳴响此則神性雄健使之然也天照
太神素知其神暴惡至聞來謂詰之狀乃勃然驚曰吾弟之
來豈以善意乎謂當有奪國之志歟と見えたり歟ハ即
疑の御辞少て此の疑小當り第一書ハ日神本

知素戔嗚尊有武健陵物之意及其上至使謂弟所以來者非是善意必當奪我天原之見又下章第一一書小見日神曰吾弟所以二來上非復好意必欲奪我之國歟と有る此即此小疑弟有惡心と有る所由あり者あり諸其素戔嗚尊ハ一御誓の時小誓勝せ給へるが如く本一の清明き御心小御在り坐り御事ハ申すも更あり且此度ハ伊弉諾尊の御許を請奉り又八坂瓊之曲玉をさへ小表物として賜はれる程の御事ハ有れども傳十五百五十ハ下八ゆも云るが如く御父母二神小事依され奉給へるハ第一ハ天照太神の疑ひ所思し着す

所あり小其神性の健く御在り坐り任せて天地を震動しして参上りせ御在り坐りバ日神の御方小驚き所思着し然る御疑ハ得させ奉給へる小あり御在り坐り又此時日神ハ一素戔嗚尊の御勅許を請り参上りせ給ふ御事を所知着ず御在り坐り御問の事あり假令所知着して御在り坐りあり有れ其眼前の事の甚しむハ必しも疑の御心ハ出来させ御在り坐り御事あり右小引り正書ハ至聞來詰之狀乃勃然而驚曰と有るを以て明しむ可疑ハ轉違の約りたる言あり可久の實として云所をも此方小ハ轉違へるありむと思取るを云あり下小汝心虚實將何以為驗と宣ひて其より御誓を成て其御疑を定めさせ給へるを以て考ふ可天孫降臨章

第二一書小疑汝二神非是吾處來者故不須許也と見
元其第五一書小天孫曰心之疑矣中略固非我子兵あじ
も有り万葉四二十の緘結師妹情者疑毛奈思と有
の十二二十小結義之妹心者疑毛無と有も同訓ふ
る者あり又其十二下得田ケルコ價異心鬱悒ト作ト得田
共小在ト語あり例あり右等の例の外多く書
煩トハ一けれバ引ズ○起兵ハ神武天皇御紀小兄弟
聞天孫且到即起兵將襲と見え又古事記同段小登美
能那賀須泥毘古興軍待向以戦と見え又其水垣宮段
小建波迹安王起邪心之表耳伯父興軍宣行中略其建波
迹安王興軍待遮各中挾河而對立相挑と有ト興軍と

御紀小ハ興師と作り諸兵ハ常小ハ都波母能と訓て
武器を云称あれト此ハ伊久佐と訓む所あり事右
小引る例共を推て知べりあり名義扱ゆ兵字小右
の二訓有あり七書直解と云物を見兵者武器也
を都波母能と云以人執兵亦曰兵と有皇國ゆて兵器
執る者を兵と云ト云ハ同ト諸此起兵と云事ハ正書
小乃結髪為髻縛裳為袴便以八坂瓊之五百箇御統纏
髻鬘及腕又北負千箭之鞆與五百箭之鞆臂著著稜威之
高靴振起弓彌急握劔柄踏堅庭而陷股若沫雪以躡散
奮稜威之雄詰發稜威之噴讓略有と約め書されり
者あり御紀小射字を伊久佐と訓ト小就て谷川士

清説小射合箭の義ありと云々然も有べき事あり
 古事記水垣宮段小尔日子國夫玖命乞云其廂人先忌
 矢可彈尔其建波迹安王雖射不得申於是國夫玖命彈
 矢者即射建波迹安王と有も忌矢を射合すあり又景
 行天皇十八年御紀小的邑イリノハラと有ハ和名秋郡名小筑後
 國生葉イタ波イタと有ハ地あり孝徳天皇 年御紀小射を
 伊久布と訓ハ漢語秋小射塚以久波止古呂と有あじ
 も射合イリノハラより出たる称あり然れバ此少ても正書ハ
 右の如く弓箭の事を具ハ舉げ第一一書ハも背負員
 靱又臂著稜威高靱午握弓箭親迎防禦と有ハ即起兵

と此小所見たる兵あ者あり故考ハ小伊久佐と云
 して争ふを云ハ戦ハハ叩合あり互ハ入交り因云將
 相挑と争ふを云あり其差別必有べき言あり
 軍を伊久佐能伎美と云ハ軍卒を伊久佐毘登と云ふ
 其を將イリノハラ射合す事を成す長キミあり謂あり御紀小軍卒イリノハラ
 又士卒イリノハラ又將卒イリノハラ又介曹之士イリノハラあじ有ハ如く軍を爲る人
 の義ありバ必然云へきあり然るハ其を唯小卒イリノハラと云
 兵イリノハラとも云時ハ射合箭の義のとありバ兵士の称あり
 むガ如くと雖も靱を負て仕奉る人を靱負と云ハ
 を佩て仕奉る人を帶刀タテとも云ハ如く唯伊久佐との
 ミ云ても兵士の称と成れりある可一萬葉二三十一
 四下ハ

鳥之鳴五妻乃國之御軍士乎喚賜而又大御身尔大刀
 取帶之大御手尔弓取持之御軍士乎安騰毛比賜六十二
 五下小千萬乃軍奈利友言舉不為取而可來男常曾念九
 あり有ハ兵士を伊久佐と云々あり二十二十七七下下小阿良
 例布理可志麻能可美字伊能利都須米良美久佐尔
 和例波伎尔之字と有ハ皇御軍の兵士と成て仕奉れ
 るを云あり如此く兵士の称ハ通ハリ事あり右
 引々引ガ如く漢土ありてハ戎具を兵と云ハ其を執ル者
 とも兵兵云云小同リあり但戰戰の事を伊久佐と云ハ
 當當らず其ハ伊久佐を爲爲ト云云てハ聞聞えざる者あり ○詰問ハ正書ハ奮稜威之
 雄詰發稜威之噴讓而徑詰問焉と有ハ同ト所あり傳

十五百十四五下下小云ハ但此ありハ正書ありハ詰を詰ハ
 誤れハ今改む詰ハ御紀ハ多那毘古到反と有とも多那流とも訓
 名義抄ハ詰詰を都具古到反と有又加牟加布又都志牟又阿良
 波須詰と訓詰字ハ那自流去債反と有とも伊佐牟とも勢牟とも
 登賀とも加古都とも登布とも都具とも有ガ上ハ纂
 疏本ハハ詰詰と作せ給へハ因ハリあり前漢玉嘉傳
 詰詰見ハ史記註ハ詰責讓也と有ハ又玉篇ハ○吾所以
 詰問罪也と見ハハ詰詰ハ非ハ者あり
 來者ハ古事記の此段ハ我那勢命之上來由者必不善
 心ハ見ハ下章第三一書ハハ吾第所以上來非復好素意
 と有テ素交鳴尊の上來坐々所以正を宣給へハ小就テ

其參昇昇とせ給へ二五所以を此二五申頭ハ一迷迷とせ給へ
 る所あり借所以の字ハ漢文モリテキスレトコハ以而來所以訓む所
 ると又由とも故とも書と字義とを合せて考ると小由
 惠ハ因ヨル末スめて其事の因起るより其然有る末と相併
 せて云ふ可し譬へハ出雲風土記あじ二所以號出
 雲者又所以號意字者あじ二云類今出雲と云ひ意字
 號たる據ハ其末末より本を原ね本より末を係して所
 以二ハ云々あり又祝詞ハ愛國登年文和食故云云又
 夜能守日能守尔守奉故云云あじ二言の中間間置置く故
 も皆其義あり又万葉あじ二ハ言の始置置せ有る十

七七小故無吾裏紐令解人莫知及正逢と有る依來る所
 を云の十二十四小何故不思將有又二十君者不來吾
 者故無あじ語の下ハ在あが打離れて故二其様を
 云二ヲ一帯木卷一ハ自然一ハ故つけて爲出る事も有る二云
 て二云意あり又余りの故由心ハ打添たるがあも
 何れも此の例一〇實ハ眞事めて事の虚あり二由と造一云
 辞あり下章第三一書ハ故實以清心復上來耳と見
 又古事記二其ハ候遠智信如言來と見え玉垣宮段
 小又因拜此大神誠有驗者あじ二有一り万葉ハ四五十
 小眞毛妹之年二所纏年又五十下偽毛似付而曾爲流打

△神武天皇御紀
 小是實天神之子
 者必有表物と有
 り又記の

衣裳眞吾妹兒吾尔恋目八七三十四小信有得哉恋敷鬼
 字又四十一世間者信信二代者不往有之十三小信吾命
 常有目八方又五十五眞毛久ニ成來鴨十一四十小眞毛
 君尔如相有十二六小佗言眞言痛成友又眞曾戀之不
 相日年多美又信吾命全有目八目十四九小麻許登可
 聞和禮尔余須等布又二十麻許等奈其夜波十五五三丁
 小於毛波受母麻許等安里夜年也十六十四小白玉之
 緒絶者信二十二十小麻許等和例多非乃加里保尔又
四十丁麻己等奈禮和我互布禮奈ニあじ眞をも信をも
 書々共小此の實字と同ト事少て此等ハ下あゝ虚實

△十丁小佐宿木宛者
 今日毛鴨散乱見

の實と同言同意ある物々所小依てハ事を慥小云
 知す々發語の眞々同トきも有る者あり然れども凡
 小所小依て其行ハを見又其行小所を以て言を聞云
 又我成す事の上少ても其空一りりざを人小明り
 ちも然云ふ事多々者あり因云此ハ歌詞小の限
 々々事あれども此實字小當りて万葉小佐祢詠々
 事多在十四丁小安志可流登我毛左祢見延奈久尔
 十五三十丁小伎美尔故布良年比等波左祢安良自又三
四丁五夜須久奴流欲波佐祢奈伎母能年十八三十六十丁小由可
 年登於毛信騰與之母佐祢奈之二十十一小伎美字安
 我毛布登伎波佐祢奈之あと有と有と是あり但文小
ハ更小

用ひたる例も無き物なり同意の語ありバ心得置へ
十四卷二十五丁小和哉可流加夜能佐祢加夜能麻
許等奈其夜波と有ハ萱を佐祢加夜と云ふて右とハ
異ありども其佐祢より應りせて麻許等と續けたる
小心を著へハ名義故を見小眞をも實をも誠をも信
をも共小麻許登とも佐祢とも訓む字あるを考合す
可き者
あり
○欲與妣相見ハ第二一書あり出たり傳十六
十五小云あり○珍寶ハ古事記訶志比宮段小西方有國
金銀爲本目之炎耀種々珍寶多在其國又神功皇后四
十六年御紀小ハ便復開寶藏以諸珍異曰吾國多有是
珍寶欲負貴國もど見えたるか如く尊き寶あり由ふ
り若て此珍ハ四神出生章第一一書小珍子と有る古
事記小ハ貴子と書れたる其義ハ已小傳九丁小委

く註々か如く借又上小云々瑞ハ坂瓊之曲玉の瑞と
此珍とハ相通へる義も有るや釋述義ハ瑞穂の事を
釋と見たり小云々五百秋者是遠指長久之秋必得珍之
稻穂也と有る是あり若然くむハ天孫本紀の十種
瑞寶も此と同く十種珍寶と云義小あり有ける
ハ本よりして瑞も共小麗美ハ心あり事云も更ふ
ハバ假令言の同トくささむり小其義ハ等ハ
小あり歸へ寶ハ寶劍出現章第五一書小杖及櫛樟此
西樹者可以爲浮寶也と有ハ船を浮寶と云ふあり天
孫降臨章第一一書小ハ坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三
種寶物と見え其第一一書小天照太神手持寶鏡授天

忍穂耳尊之有ハ謂ゆ々天津璽を寶シ申奉りしあり
 崇神天皇六十年御紀ハ武日照命從天將來神寶藏于
 出雲大神宮有て下小其美御神卷寶御寶主也見え又仁天皇三十九年御紀ハ命五十瓊敷命
 俣主石上神宮之神寶之有ハ神財を寶と云々あり其
 八十八年の下ハ天日槍ガ將來ゆ々をも神寶と云々
 を古事記ハ玉津寶之有ハ又仲哀天皇八年御紀ハ
 愈茲國而有寶國中略眼炎之金銀彩色多在其國之有ハ
 神功皇后御紀ハ財寶國之作て右の金銀彩色の其
 國より多く出ると因て云稱あり皇極天皇を天豐財
 皇日足姬天皇と稱奉り豊財ハ寶の餘饒足へ々義の大

御名あり万葉三ニ十ハ不盡山をも寶十方成有山
 可聞と詠と五ハ八ハ銀母金母玉母奈尔世武尔麻佐禮
 留多可良古尔斯迦米夜母と詠とあじハ金銀珠玉を
 寶と云ハ依て子をも云あり傳十四百七十ハ註せ々
 百姓と意富美多加良と云ハ大御田族の義あり出來
 り々稱ありが其も江家次第ありハ公御財と書ハ
 て大御寶の義ハ取成されたる者あり其原別あり
 事の一ハ合る者あり儲寶ハ高在タカウと云義あり世ハ在
 由々萬物ハ勝りて高く貴日謂あともや有るむり
 予先ハ天下の百姓を大御寶と云より轉りて財物
 を寶と云ありむと思ひしうとも猶別ありけり又金

△根國の渡りも給
ふ不就して特見
参上せ給ふの
ころ有けれ

銀珠玉を贖と云々其称を及ぼして百姓を然云ふて
云むと違ふ可し言も意も似たりう混ひ易き事小
あむ有 **○欲獻ハ唯ハ素戔嗚尊の御心とて獻とせ**
給ふ謂ハ非ず右ハ天照太神疑有悪心起兵詰問
と有ガ如ク素戔嗚尊ハ素より赤心ハ御在し坐し
ウども謂ゆる神性の雄健く御在し坐ゆ故ハ其御
所爲共ハ就て此ハ天照太神の甚しく疑ハせ給へる
を以て不敢別有意也とハ申させ給へる物の其あて
も猶證據と爲べし所無ハ故ハ先ハ御父大神より昇
天の事を許可し宣ハせたる御衣ハ八坂瓊之曲玉を
ハ其ハと無く獻とむハ天照太神の見行ハ御在し

坐て其御疑を聞けさせ給へる事を期り奉らせ給
へる者ハあむ有けれ 此ハ此一書の中ハ殊ハ眼目
と有る事ハ縁の由縁ハ非
るを以て此卷首より始て條々ハ説著て者あり纂
疏ハ素尊以曲瓊進日神而表赤心之明淨と註させ給
へるも然る事ハ有れども猶此の義を明くハ得
させ給へる御説ハ非ずあり又或人の温潤の徳を
献呈すあり云ふ也 然る表物を以て事の虚實をハ
ハ取ハ足らざるあり 定むる事ハ土代の常あり此ハ引出て其一例を擧云
むハハ神武天皇御紀ハ長體彦乃遣行人言於天皇曰
嘗有天神之子乘天磐船自天降止号曰櫛玉饒速日命
略夫天神之子豈有兩種乎奈何更称天神子以奪人地
年吾心推之未必信天皇曰天神子亦多耳汝所爲君是

實天神之子者必有表物可相示之長髓彦即取鏡速日
命之天羽羽矢一隻及步鞞以奉示天皇天皇覽之曰事
不虛也ナリヤリト有也此の例あり後ハ文字ニハ物の有て
テ文書を以て證據ハ立められ決りて遠ク古昔ハ
然ル物ノ無クつれば今茲少テ御父大神ノ勅許を請
テ参上ル來給ヘル由を申させ給ヘルむも何を以
テハ其必實ありけりトハ所思ノ定めさせ御在ノ坐
む故羽明玉神を以て令賜給ヘル瑞八坂瓊之曲玉
を以て事實を明ニ奉給ふル外ハ爲させ給ふ可
キ道の御在ノ坐ざりけり其時の勢を推量奉ル可ク

あむ有けり然ルされバ何を以テ玉を献ルせ給ふ
命の歌ハ天在ノ第桐機ノ嬰ルセ玉ノ御統云云と
も詠ねたるが如く其玉ノ美麗ノ事ハ天ありハ
如ざる事あり何を何ガ奇珍ノ玉を献ルせ奉ふ
事の御在ノ坐む右の如く止事無ク由來有ル爲ハ
取立テ然ハ申ルセ ○別ハ古事記ハ無異心ト有ル
給ヘル者ありけれ
異字ハ相當ル語少テ許登ハ此外少テ此物の外ハ
義あり古事記御天降段ハ故別遣天迦久神可問ト
有也他神を召す序ハ非ズテ殊更ハ問ハ遣さる
を云ひ此の天孫降臨章ハ故皇祖高皇產靈尊持鐘憐
愛ト有ル持也他御子等トハ取別テ憐愛シテ給ヘル
由あり舎此ハ准ルヘテ知ベリ万葉中ハ四三十一ハ故

妻戀爲^レ立^レ而可 去哉七^四十^十 小殊放者奥^レ從酒^嘗十

三十 小事更^レ尔衣者不^レ謂^摺十二 二十^十 小紫草^草草跡^別別

伏鹿之野者^殊異爲^レ而心者同十三 三十^十 小琴酒者國丹

放嘗^レ別避者宅仁離南^レ有^レ共小別の例^レあり傳十

百九十 小別處の事を云々考合す可^一 右の四卷の故

登佐良^ルと訓^レ同ト右の殊更^レと云も此^外 史記^小許

小又更^レおと云意^{あり}わ此の別^と同^一意^{あり} ○不^レ敢

別^レ有意也ハ正書御父大神^小請奉^レせ給へ^レ御言^小

吾今奉^レ教將^レ就^レ振國故^欲暫^レ向^レ高天原與^レ妙相見^レ而後永

退^レ兵^レ申^レさせ給^レひけ^レる^小勅^許之^と宣^レへ^レる^小就^レて参

上^レり^小こ^ろ有^レけれ^レ此^外 小意^{あり}有^レ非^レず^と其御表^の

瑞八坂瓊之曲玉を獻給ふ御事^小徴^一て聞え奉^レせ

給へ^レ是^{あり}古事記^小此時の事を尔速須佐之男命

答^レ白^レ僕^者無^レ邪心唯大御神之命^以問^レ賜^レ僕^之哭^伊佐知

流^之事故^白都良久僕^欲往^レ妣國^以哭^レ尔大御神記^汝者

不可^レ在此國^而神夜良比夜良比賜^故以^レ爲^レ將^罷往^之狀

参^上耳無^レ異心^ノ所見^{たり}是實^小素戔嗚尊^の御心^小

御在^一坐^{あり}記^傳七^四十^十 小始^小無^レ邪心^と白^一て又

此^小無^レ異心^と申^一給^ふハ今言^一つ^レ事^の由^の外^小

別^レ意^趣ハ無^一と^{あり}と註^{され}たり^ハ能^レも此^の不^レ敢

別^レ有^レ意^と有^レる^文意^をも兼^て盡^一し^究め^るたり^者

小あむ有けり
此事已小傳十六卷十七丁あむ第一ノ一
書の只爲暫來耳の下ゆも云ねども余
ゆ小此小相應ひて美く所思ゆ
々故小又更小引出たる者あり

時天照太神復問曰汝言虚

實將何以為驗對曰請吾與

姉共立誓約誓約之間生女

為黒心生男為赤心乃渥天

真名井三處相與對立是時

天照太神謂素戔嗚尊曰以

吾所帶之劔今當奉汝汝以

汝所持八坂瓊之曲玉可以

授予矣如此約束共相換取

此ハ右の素戔嗚尊の申給へる御言ハ就て天照太神
の判^{エトワ}せ給ふ所あり諸此ハ物根を相換させ給ふ事
の御約束御誓ハ前立て宣ひせたるハ異ある傳の如
く雖も然ハ非ずあか有けり其ハ正書ハ於是天
照太神乃素取素戔嗚尊十握劍^中又既而素戔嗚尊乞
取天照太神髻髮及腕所纏ハ坂瓊之五百箇御統^下
見え又古事記ハ天照太御神先乞度建速須佐之男
命所佩十握劍^中速須佐之男命乞度天照太御神所纏
左御美豆羅八尺白璵之五百津之美須麻流珠而^下
有ハ不意^ク狀の如くあるハ此の傳の如く先ハ其御

約束御在ハ坐すと見奉る時ハ殊更ハ義理ハ於て明
く^クある所有る者あり^{乞取も乞度も自他ハ居て}
あり^{云のくみして其事相同トク者}
天照太神の御あり是甚ハ正^ク傳あり^{を右引}
正書^{又古事記共ハ此ハ}故此ハ是時天照太神
謂素戔嗚尊曰以吾所帶之劍今當奉汝汝以汝所持ハ
坂瓊之曲玉可以授予矣^ク有る御約束の事有て下ハ
共相換取と有る文ハ正書の乞取古事記の乞度ハ當
る所あり如此して天照太神ハ三女神を素戔嗚尊ハ
五男神を成出奉らせ給ひ畢て然後ハ其物實ハ依て
品定る事ハ正書ハ出たる事あり古事記ハ

於是天照太御神告速須佐之男命是後所生五柱男子者物實因我物所成故自吾子也先所生之三柱女子者物實因汝物所成故乃汝子也如此詔別也と有が如く五男神ハ天照太神の御子と坐一三女神ハ素戔嗚尊の御子と坐す御事あり上小右の事有る時ハ此の結ふむ甚能合へる者ありけり但正書古事記共小其詔別有ハ此傳小勝りて宜しくハ有れども上小物根を相換させ給ふ文無きハ又此一書ハハ劣れる所ふねハ合せて心得よ外ハ無き者ありざりし思ふ小事記共小本ハ此傳も有つむを物實の事をしも傳へ僻めたりしより有つる本の文をも己く削除たり

し小有べし何れかして○復問曰ハ先小詰問ハせ給ふ事略たる事小あり○復問曰ハ先小詰問ハせ給へる小素戔嗚尊の申させ給へる御答小御心の明く浄き程を明しめ奉らせ給へるを諾しし聞着させ給へれども其云ふ所と神性の雄健く御在し坐す御行の上ありハ猶許可させ給ふ所も至らせ給へざりし又其言の上小就て問復させ給へる事此小汝言虚實何以為驗と有を以て明しむ可き者あり故先小ハ詰問と有を此小ハ復詰問とハ無きあり然るハ天照太神の御方小少ハ然もやと聞着し分させ給ふ所有○汝言虚實將何以為驗ハ正書小復問曰若然者何以明赤心也と有る古事記小も尔天照太

御神託然者汝心之清明何以知と有る所是あり右ハ
紀小吾元無^對心記小僕者無邪心とも又無異心とも
有^對天照大神の其御心の清濁を質し給ふ所ありを
此小汝言と有ハ素戔鳴尊の吾所以來者實與^欲姪相見
云云と忠立て申給ふ御言小就て虚實を正し給ふ所
ありハあり汝言ハ伊麻斯我伊布許能と訓り又ハ伊
許登能^伊少ても那賀許登能^伊少ても有べきありども古
く訓來る所小從ふ可^伊天孫降臨章第二一書小今者
聞汝所言と有る言字ハ麻衣須と訓れハ
又ハ麻衣須許登能と訓ても有る可し ○虚實ハ字
の任小訓ハ漢文の格あり日月と書て都紀此と訓
むが如く此も倒反して麻許登伊都波理と訓へり字

あり如此並云々例ハ多く物を糺彈す所小在る事小
て神功皇后四十六年御紀小因以祈天神曰當遣誰人
於百濟將檢事之虚實當遣誰人於新羅將推問其罪と
見^イ允應神天皇九年御紀小天皇則推問武内宿祢與甘
美内宿祢於是二人各堅執而争之是非難决^イ天皇勅之
令詰神祢探湯と有る又允恭天皇四年御紀小一氏蕃
息更爲^イ萬姓難知其實故略坐探湯瓮而引諸人令赴日
得實則全偽者必害於是諸人各著木綿手纏而赴金探
湯則得實者自全不得實者皆傷是以故詐者愕然之豫
退無進^イと所見たる是あり万葉四五十六下小偽毛似付

今上事記序も帝
紀及本辭既正
實多加虚偽云
事有り

而曾為流打布裳真吾妹兒吾尔戀目八と一歌小真
偽とを二共小詠たとも有り後の歌ゆも集小偽
ハ實をハ我ハ頼おむと詠たとも思ふ物う今更小誰
の類此彼見えて珍くくずハ○虚を伊都波理と
訓々言義ハ實ハ真事あり小就て思小其反ありハ
空カハ在あり可一神武天皇御紀小兄猶ハ事と潜伏其兵
權作新宮云云願知此詐善為之備と有々權小宮を作
て事を成すハ空けたる事構て謀と成あり故詐とハ云ハ又
長髓彦ガ言小奈何更祢天神子以奪人地予吾心推之
未必為信ハナラと云々も空けたる事を押張て人地を奪給
ふ小やと云あり古事記訶志比宮段ふ々神の御言を

信給ハざと所小尔天皇答白登高地見西方者不見國
土唯有大海謂為詐神イハ略下有も空けたる事ハ取
合せ給ハざとを詐為すとハ有あり神功皇后御紀小
今御孫尊所望之國譬如鹿角以無實國也ウツケタルニと有々無實
と宇都祁多流と訓で顯宗天皇御紀小在々虚字の訓
小同トく又右小引々允恭天皇御紀の詐字の傍訓小
宇都波理とも有ハ其語の本然ハ一ハ依ねる者と所
見たハ通證ハ實者天載也虚者忌敬破也ハ云々ハ
無加流の末輩の説ハハ甚無益ハ和訓栞ハ
何時暗の義暗昧の義あり可ハ云々ハ笑不可ハ予
も亦先ハ思取たる人笑の一説有ハ伊都波理の言ハ
氣逼ハふハ可ハ物ハを偽ハ時ハ其氣の逼りて伸ハる者
あり獄令允察獄之官先備五徳の義解ハ謂五聴者一

△今下が其の上の上
居て下小誓約曰云
事ありあり

小同ト傳正書小ハ與姉共誓ト有リ古事記小ハ各字
氣比而生子ト有て立ト云事無小此傳ハの中ハ 此
と次の誓小相對の
小ハ誓約ト（そのまゝ）有（そのまゝ）第一一書小相對而立誓曰第
六二書小相向而立誓約ト有ト同ト訓多所ありハ
右ハ唯小誓曰トの云所あり立ハ（誓を成て事と）定むト謂ありハ
カ○誓約之間ハ正書小誓約之中此云字氣譬能美難
箇ト有ト同ト傳十五 百八十 四下 小云カ○生女爲黒心生
男爲赤心ハ正書小如吾所生是女者則可以爲有濁心
若是男者則可以爲有清心ト有ト等トけハ此の爲
字ハ（オモホス）以爲ト訓を同ト爲 （トク）字あり事を曉ト可あり

傳此事ト下章第三一書小ハ於是素戔嗚尊誓之曰吾
若懷不善而復上來者吾今齧玉生兒必當爲女矣如此
則可以使男御天上且姉之所生亦同此誓ト有ト大抵
ハ同ト傳ありを終小且姉之所生亦同此誓ト云ト一
句ハ心得難ト事あり素戔嗚尊トハ日神小疑ハれ
奉トせ給へハ其清ト御心を明トめ奉トせ給ふ可
ト爲小男御子を生出て誓ハ勝トせ給へハ驗トハ
見え奉トせ給ふ可ト御事ありけハ争でトハ日神の
其小競ハせ給ふ御事の御在ト坐ハ此ハ傳十五 百八十九

丁より始て次く云ふ如く素戔嗚尊の赤心小依て
八男御子 成出坐べく又日神ハ其小合せて女御子
を成出給へるむ其少て疑はせ所思く御心を解せ
給むと云ふ御約束あり然れハ同此誓とハ
共小男御子女御子を得させ給むと云義ありハ非
者あり故先立て日神ハ三女神を生坐し後小素戔
嗚尊ハ五男神を生坐しハ共小平くあり者
ありて右小同此誓と云所あり又此小反して日神の
男御子を得させ給ひ素戔嗚尊の女御子を得させ給
へるむ小其が此誓小同くざり者少て凡ての
事共徒小成以て行て甚ト大枉事の極くと云者ふ
可き事あり 若て傳十六 二十 小己小云々如く正書
也此も下章第三一書あり右事記も共小右の如く

素戔嗚尊より申させ給へる御言のこ有て天照大
神の其小御對へ爲させ給へる御事の見えざるハ何
時より傳へ漏りたり者あり可く其ハ第一一書
小於是日神共素戔嗚尊相對而立誓曰若汝心明淨不
有^有陵奪之意者汝所生兒必當男矣と見え第三一書小
日神與素戔嗚尊隔天安河而相對乃立誓約曰汝若不
有^有奸賊之心者汝所生子必男矣如生男者予以爲子而
令治天原也と有る是あり但予以爲子而令治天原と
云まてハ余の小事小過^{合狀}たれども右の如く御對の文
ハ此小必しも無てハ叶はざり所の者あり 神祇本紀
小ハ此所

△の堀ハ菅陸風王記
 新治郡條小島宮
 新井其水浄流仍以
 治井因號郡號者
 其常陸國名云々
 所小新令堀井流泉
 淨澄有有御事有
 又此井堀事ハ
 猶茨城郡條郡東
 十里泉原無有傳武
 天皇信留岳上進奉
 御時令水部新堀
 清泉云々有有
 備此事

を綴り合せて此の堀天之眞名井兵の下小此文を出
 一次に二柱神の物根を相換させ給ふ所小續けたる
 ハ然不言ふ ○堀天真名井三處六傳十五百九十小云
 者あり 九丁
 如く天真名井ハ天安河の瀬の中少て井云べ
 所少少少て尋常小云ふ堀井の章小ハ非るあり然
 るを此小三處を堀と有ハ巴字の形の如く此少り彼
 へ廻り彼少り此の水の巡り復る狀小物して物を洗
 濯ける水の一處小滯りざら爲小物爲させ給へるか
 ところ有けめ口訣小堀天真名井三處者慇懃之謂也
 云ハ盡さざる所有を其下小竊以如爲水原卒云々
 小味ハ無小ハ非るあり 原ハ原の正字あり説文小
 竊水泉本也从三泉出丁下

△見名又丁字を
 巖人可居

後人但作原而加水於其旁今經傳源流淵源字皆作源
 兵云云是ふり名義抄小ハ原又原を原の正云有り
 諸三女神の石清水天真名井ハ就て事無き由有御事ハ已小其あり云々
 猶豊前國宇佐宮ハ此三女神を神代り祀奉ハ本宮
 小御在坐ガ八幡本記四四十小馬城峯宇佐宮あり
 五十町東南の隅小當れり又御許山とも号す社説小
 云傳るハ八幡大神菱形池少て神告有前小此所小
 て靈光を顯し給ひける小照曜く事日光の如くあり
 一故其光の移り一所を日足里云ふ後ハ八幡宮三
 所を此山小祭るとり各石体あり 一の石体高三間許
 其二ハ此より低し
 又御許山の頂磐石の中絶小奇異の神水有り 廣き五寸
 深き一寸

六此水大水の増ふず大旱小も減ず大寒小も凍る
ず酌ども盡すも云ふ略下と有り此事通證玉木某が文小三
女神始降臨之處曰御許山距神宮東五十町絶頂有磐
石常湛清水旱魃莫涸雨雪不汚称之石清水後遷祭於
今社地と有を以て右の八幡大神ハ三女神小御在
坐を知べし但右の文ハ應神天皇の後小現れとせ給
へる事打混れたる所も有れども其ハ傳十八
ト十
カ辨ふ可きが此石清水ハ三女神小由縁あり 事を
此めて明くむ可あり然る小山城國乙訓郡山崎離宮
八幡宮ハ清和天皇貞觀元年八月廿三日宇佐より先

今又下云遠瀛
の水島中瀛の天河
海濱の鏡水と
も考合す可く又後
國神名帳ハ正六位上
宗形御井天社也
有る右の例也事
思合す可

此離宮小移鎮坐し地あり其神殿の下より石清水
流れ出るも本宮宇佐宮の石清水を移せし者あり
又其後久世郡雄徳山小移奉りしが其も神宮の下り
側カ石中より流出る清泉有り此を以て石清水八幡
宮と称奉る事少て皆其原一ありを思ふ可し 又傳十
百三十一小註せし神名式筑前國御笠郡竈門神社名
神大に有ハ祭神玉依姫命小渡りて給ひて此三女神
の御事あり此社の下カ益影井とて清水涌出る岩窟
有り東西四尺余南北三尺余有て清浄あり神水あり
由ありハ此も右の宇佐山崎男山あり小祀祭る三女
神の石清水小同一偕又右小云々如く井を移すと云
例ハ天真名井を天上より高千穂宮小移し其より丹
後の比治眞名井小移し又其より伊勢小移せると同
し事 偕其石清水八幡宮ハ一も神告有 皇御孫尊の
カ住せ奉り

傳九斗小云多如
由共あり有て

近守神として遷奉り伊勢太神宮小亞て重く宗奉
るせ給へる御事ありを源家の輩あど俗小云ふ氏神
の如く以成奉りて私の物傳つる齋の如く爲りてハ其源と
云ハ水源を云称ふ由有ければ石清水と申奉るを由
縁小して其始公何と無く尊奉り初たるは其始の
事も何も知れず成て後小ハ其八幡宮小御在り坐
す掛まくりも甚も可畏き輕島明宮御宇天皇をとも已
か私の祖神の如く思居るころ甚速無事ありけれ
允源氏の諸流ハとも姓氏録左京皇
別上小源朝臣略信等
八人は今上親王也而依弘仁五年五月八日勅賜姓貫

於左京一條一坊即以信爲戸主と有る此姓として謂
ゆる嵯峨源氏はあり次小ハ清和天皇宇多天皇村上
天皇等の御流の源氏あり其も姓氏録の例して推時
ハ清和天皇皇子貞純親王之後也とク又ハ清和天皇
六世經基王之後也とク云文格ありを其つても天皇
を指て我祖神ハ申奉り難うと可きと其よりハ遙小
遠り天皇をとも指て氏神と申す事ハ其謂れ無き事
あが其元ハ源を美那母登と云を石清水小思寄せ
たり小起り小あり有けり文明十三年中院一位通
秀公記小三月廿五日兼
俱婦參會平野奉加等事也允源氏神以平野社以平野社
爲正也於八幡宮者清和源氏義家以來事也と見えたり

るも當らざる事あり氏神と云ハ其家の祖神をこり
ハ申すあれ清和源氏少石清水を崇奉るあり其
小由縁有て殊小崇敬ふ神少其ハ私の心得り物
爲る事小こり有けれ争でりハ祖神とハ云む漢籍禮
記のも族人不得以_下其威威君位也又諸候不敢_下天子
故賜姓則異祖廟也と云る意味無小ハ非ず其ハ我皇
祖天神ハ_上も天皇を始奉りて天下万民の祖ハ我皇
とせ給へども天下万民_上御祖とハ申奉る可
く_上法あり故小祝詞ハ皇親神漏岐神漏美命
と申奉る小非ず此を以て源氏の八幡宮を祖神と
して私物小思ふ事_上の備上小云るが如く右の天真
名井三處小堀と時其三の水原より水の濁くが如く
巡る状實小巴_上云紋の状小似たり可_上傳十五百二
十九
丁小云るが如く出雲風土記秋鹿郡惠曇郷條小須佐
能乎命御子磐坂日子命の國巡り坐時小國稚美好有

國形如畫鞞哉と宣給ひて已く神代小鞞小畫く事ハ
有けらるる備其鞞ハ天照太神の始て用ひさせ給へ
り兵器あり故小後小此天真名井三處の圖を畫用
たり_上其形を畫鞞と云ひ終小巴_上と云事小成り
る者あり可_上通證ハ右の説文小羸水泉本也ハ三
泉出_下下と云を引て今鞞面鼓面畫巴蓋出于伊勢石
清水等象水濁也瓦口造巴文亦取防火與畫水草同と
云るも由無り事小ハ非らるる此少巴の説盡せり
遠詩巴江學字流ニ巴記曰閼苑白水東南流曲折三廻
如巴字故名三巴是也と云り猶正書稜威高鞞の下
小云る事共考○相與ハ寶鏡開始章小相與致其祈禱
合す可_上あり

焉とも有り阿比登母尔と訓む字あり相ハ古事記小
 各字氣比而生子と有る各の義あり万葉九三十一小各
 競キミヒと有ハ相競アヒキマヒと云と同ト意ありを見べ一第フ一書
 小日神共素戔嗚尊相對而立誓曰第三一書小日神與
 素戔嗚尊隔天安河而相對乃立誓約曰と有る即相與
 あり右ハハ相と與とを離ち云々を此ハハ合約ナク
 あり古事記國作段ハ吾能共與相作成と有る相
 共樂の義ハ○對立ハ向合立あり万葉十八三十一小牟
 可比太知蕪泥布利可波之二十四十小牟可比太知可
 奈流麻之都美あり又四四十小向座而雖見不飽
 十五三十一小牟前比爲互一日毛於知受見之可持毛と

有ハ俗對座と云程の事あり右とハ同トくろぐ又十
 一ハ小對面者面隱流物柄尔と有る對面者を牟加倍
 禮婆と訓せたりき倍此の對立を倒反して立向と云
 語多一万葉一二十小大夫之得物矢手挿立向射流圓
 方波二三十一小不奉仕立向之毛露霜之消者消信久去
 鳥乃相競瑞尔又四十挿弓手取持而大夫乃得物矢手
 挿立向高圓山尔九二十三諸之神邊山尔立向三垣乃
 山尔又三十一入水火尔毛將入跡立向競時尔あど有り
 右の中ハハ十九卷十八下小曉來者出立向暮去者振
 故見都追と有る出立向と同ト意あり見ゆれども
 其義小於てハ異ありず但對立と云時ハ居り○是時
 あり方も有る云白と云へハ事の劇あり

天照太神謂素戔鳴尊曰云云ハ正書小於是天照太神
素取素戔鳴尊十握劍と有る素取小當る所あり古事
記しも故尔各中置天安河而宇氣布時天照太御神先
乞度建速須佐之男命所佩十握劍と見えたる如く
不意り狀ありども此小先此御約束の御在し坐す事
甚變たりとも何とも云へば更あり然れが右の傳
ありハ其御誓小臨りて頃小素取給へる趣小在を此
ありハ如此く先相換て各其御手小渡し奉り諸御誓
小ハ其手携給へる物を出して嚙断せさせ給へる
り次小己而天照太神則以ハ坂瓊之曲玉中略於是素戔

鳴尊以持所劍略下あり各其御自の物の如く見ゆる所無
か故小上小斯々文の無てハ物根の事も何も知れ
ず成以て行く事し有ければ甚變たりとも云ふり
若此文の無くりば此も第一書第二書第三書の如
く成て終小天津日繼ハ天照太神の御子孫と成ま
すハ物ふ ○吾所帶之劍ハ正書小急握劍柄と有る古
事記小其御劍を云ふハ傳漏せり者あり此小ハ
天照太神の自食御させ給へる趣小傳たるハ此と違
ひて僻事小ハ有れども第一書小乃設大夫武備躬
帶十握劍九握劍八握劍と有る武備の第一と有る物
ありハ御劍を帶せさせ御在し坐けむ御事亦甚明る

々ありける者あり諸右の三劔を帶せさせ御在り坐
る傳ハ己小傳十七十二小云々如く甚く異あり傳ハ
ハ有れども其を立て云む此下ハ所見たる五男
神と申すハ實ハ天忍穗耳尊天穗日命天津彦根命の
三神あり活津彦根命熊野櫛樟日命ハ亦名の入混ひ
て別神の如く成れる者あり又此小掘天真名井三處
と云々ハも合はば第一書第三二書等小右の三劔
より三女神の成出させ給へる有る傳ハ實ハ其
三劔より男御子の成坐る傳ハ有れども既くより
五男神と云習ハりたる有る其數の合ざらるを厭ひて

△地神本紀ハ可以
授吾笑ハ有り然
本も有り

情進小政たるも知べり何れも甚く已
と見えたり然れども右の如く三劔あり其者
小打折爲三段と云ハバ三男神あり合ざらる非
ず此小對へる玉も一物あり小瓊端瓊中瓊尾と云
事有れ猶三劔を云ハ甚く異ありける傳ありむ
○奉汝六天照太神の大御身小取帶せさせ御在り
坐す大御劔ハも武備を設させ給ひて素戔鳴尊を
防禦ぎ奉らせ給ハむ御料あり然る止事無り御物を
渡り奉らせ給へるハ先小汝言虚實將何以爲驗と宣
給へる折言約の御中小男御子を生給りむ事を申させ
給へり此少て清明り御心以て參上らせ給へり
御事あり著明りけり漸皇太神の大御心解させ御在り坐

才端小至れり一が故小渡一奉らせ給ひ又素戔鳴尊
の欲獻瑞八坂瓊之曲玉と申奉らせ給へるをも受納
させ御在り坐むとあり故此めてハ素戔鳴尊の御心
の黒赤ヨサアサキを所知者一分別させ給ひむが爲と御身自の
大御心小得しも定の敢させ給はず御在り坐り事の
トを合させ給ひむが爲小御疑ハ稍解ても御折言ハ
猶爲させ給ひけりあり若て其御誓の驗を見奉らせ給へる上りてハ於是日神方知
注素戔鳴尊固無悪意と第二一書小然然○汝所持八坂
出たるが如く小至れり者ありけり
瓊之曲玉ハ第二一書小素戔鳴尊以其頭所嬰五百箇
御統之瓊と云事の出たる小就て考る小昇天の御表

物ありければ殊小著明り狀小取懸させ御在り坐け
むり一此小所持と有る手あり小推乃させ給へる事小
見り時ハ然る御表物の所詮無き事あれば此ハ其所
嬰を所持と云ふて有へり者あり第三一書ハ左
髻之瓊にも又嬰頭之瓊にも有ハ同ト物ありを合せ
考ふ可一但其瓊ハ素戔鳴尊の御自御子を成坐る
由の傳ハ右僻傳○可以授予兵ハ予尔授奉禮登詔
あり事云も更あり
給比伎と訓附べし授を佐豆祁麻都流と訓ハ天孫
降臨章小依れり猶續紀第五詔小掛畏岐我皇天皇
授奉岐第二十八詔小位方授末都流事并第三十六詔
小是位并授末都良年申佐方あど此外小も所り小多在

の其余の世の御紀の神社の御位を進らる事
事を記さねたるは必奉授と有れば唯授と有をも
神階の時あり其の准ひ訓べくあむ有ける万葉四
十の玉主尔珠者授而二十五十の許等大豆底佐豆
氣多麻漱流ふじ有の大九賜タマと同語あるが賜タマハ上
より下へ物を與ふ事ハ云々を授ハ然も非らぬや
天孫降臨章大己貴神の唐矛を奉るせ給ふ所ハ授二
神と見え古事記海神宮段綿津見大神より火速理命
奉るせ給ふ事を授鹽盈珠鹽珠拜西箇と有り故授
ハ奉附サツツして我許を放奉りて向人ハ寄附る謂ある可

△神樂抄物歌林の穴
乃王礼仁久礼多留
云々有り傳十九卷
三百七十五下云々
如
△土佐日記ハ指取綱
持て来たり酒あり
久留見を又

くや有む此の以授ハ久禮與と云假名を付たり通證
久志又久世と云禮與來於予之義也と有り京の方言ハ
言有れども早し語あり又都鄙共ハ久禮又久流と云
佐豆久と訓ハ後ひつ通證ハ地神本紀延佳本ハ授を
人ハ千の金の取すとも秋暮るる惜くハ有り
れと有ハ文流と云○共相換取ハ正書ハ見えたるが
云係たり者あり如く素戔嗚尊の御物を索取せ給ひ素戔嗚尊ハ天
照太神の御物を索取奉るせ御在り坐て相共ハ御子
を成し奉るせ給へる是あり此即物根と成れ御事
ありて三女神ハ素戔嗚尊の御子と坐し五男神ハ天照
太神の御子と坐す所由是ハ在る事あり深く心を
入て見奉る可き所あり然るを地神本紀ハ此の文を

此の又奇しき事あり
 有けし秘傳書録の
 少名彦神武天皇
 常世國之時に海邊
 國神賜に瓊瓊杵玉
 振蕩草の自りて
 以て藥草の文易
 世給へり少く次
 德天皇二年七月詔
 先是諸物以殺生
 自今以後以美名
 玉交易莫用殺生
 諸國每出美名玉
 玉割製造神寶本
 德天皇五年四月詔
 河國獻赤色寶玉
 百九十六年二月出
 國獻赤色寶玉九
 上七年七月周防國
 薄香寶玉五百六十
 八月駿河國獻黃
 寶玉三千三百千
 二月伊豆國獻白
 寶玉五千二百五
 與國黃色寶玉十
 二百二十二年九
 後國獻赤色寶玉
 百二十二年信濃
 白寶玉八百五十
 出神天皇御朝每
 年奉獻此種數秘
 府略未知何國朝
 貢今所載在香色
 寶玉二百八十種
 形有大小赤色寶
 玉二百七種形有
 大小黃色寶玉五
 百七十三種形
 有大小白寶玉七
 百二十種形有
 大小黑寶玉二百
 九十種形有大小
 赤寶玉二百七十
 種形

取入ありて傳へし合さる事小心や後れたりけむ
 吾以所纏之玉可以授汝矣汝以所帶之劍可以授吾矣
 如此約束相共換取と書るハ心穢く且ハ拙き所為不
 者あり 但其舊事紀の撰者ハ限らず誰かして唯
 一度り讀見たりて少て其蹟を索り深く古
 今の事實ハ徴し考るハ非れバ予ガ上件條ハ相換ハ
 云如し説ハ出來すドければむ可ハ非ず
 右ハ相共換取ありて其意明しけし海宮遊行章ハ試欲
 易幸遂相易之と見え古事記同段ハも尔火遠理命謂
 其兄火照命各相易佐知欲用三度雖乞不許遂纔相易
 と有り又仁德天皇元年御紀ハ今朕之子與大臣之子
 同日共產兼有瑞是天之美衣焉以為取其鳥名各相易名

此撰者ハ天皇御代の人ありけり其頃御府ハ細物右の如く有て上古ハ天下交易の物たりあり此ハ日神ハ
 素戔嗚尊等ハ如此く物と相換させ給へり是は始あり傳十五百六十二ハ行ハるハ如く此時ハ始て成出させ給へり三女神ハ
 市姫神ハ申奉りて止事無き所由此ハ在る事ありけり但其ハ下ハ秘府略曰應神天皇十七年五月武内宿禰
 博士和珥吉師等議曰自先朝外國所貢金銀及諸寶貨ハ多ク下府庫且以金銀造貨幣用寶玉許さ
 右ハ然り其次ハ十八年二月詔用玉莫止と有り猶玉ハ金銀ハ共天下ハ通用ひたりありけり

十七ノ上
春夜春
大島海流

